

権力なき社会へのヒントに

文化

bunka@asahi.com

日曜・金曜掲載



土鬼の人々に腐海との共存を訴えるナウシカ ©Studio Ghibli

漫画版『風の谷のナウシカ』

産業文明が滅びて1千年。世界は、巨大な蟲たちが生息し、有毒の瘴気を出す菌類の森「腐海」に覆われつつあった。腐海のほとりにある人口500人の小国「風の谷」族長ジルの娘ナウシカは、大国間の戦争に巻き込まれつつも、人々を救い、腐海の謎を解こうとする。

コロナ下で読む ナウシカ

上

『風の谷のナウシカ』は1982年初めから月刊誌「アニメーション」で連載が始まった。当時、同誌編集部には在籍していたスタジオジブリの鈴木敏夫プロデューサーの2人によれば、79年の映画「ルパン三世 カリオストロの城」以降、長編作品演出の機会に恵まれなかった宮崎さんが、長年蓄積したモチーフを一気にはき出すかのように描き始めたのが「ナウシカ」だった。単行本全7巻の発行部数は現時点で1700万部を超えている。84年に映画化された後も、宮崎さんは映画制作の合間を縫って、漫画版の続きを懸命に描き続けた。連載中には、チェルノブイリ原発事故、東西冷戦の終結など、世界の流れを変えるできごとが相次いだ。

文明が崩壊し、マスクなしでは生きられない時代を描いた漫画版『風の谷のナウシカ』。宮崎監督が足かけ13年をかけて描いた作品世界は、映画版をはるかに超える広がりや深みを持ち、コロナ下の閉塞的な状況ともどこか重なる。「ナウシカ」から今、私たちが得られるものは何か。「ナウシカ」に魅せられた人々と共に、2回にわたって作品を読み解いた。

命令でなく調停 管理より自分の意思



デジタル版で、鈴木敏夫プロデューサーのインタビューなどが読めます。

中でも宮崎さんに衝撃を与えたのはユーゴスラビアの内戦だったという。長年の争いの果てによりやがて平和を築き上げたはずの同国だったが、東西間のパワーバランスが崩れるや、再び民族間の対立が激化し、戦闘や虐殺を招いた。漫画版の作中では、トルメキア王国と、映画には登場しない「土鬼」という帝国が血みどろの総力戦を繰り広げ、おびただしい数の死や、憎しみの連鎖が描かれる。

なぜ、宮崎さんは漫画版「ナウシカ」にこだわったのか。鈴木敏夫さんは「宮さんは映画では、何百人ものスタッフを率いて作る以上『テーマはみんなが納得する公的なものでなくてはならない』という思いが強いし、観客のことを考え、『最後は明るく』というのをやり続けてきた。だから、漫画は個人的なものだから、自分の好きにやっていた。それは心ひかれるものだったと思う」と語る。

25年の歳月をかけて著書「ナウシカ考」を世に問うた民俗学者の赤坂憲雄さん(67)は、作中の権力者たちに注目する。

トルメキアの女王は、自国の労働力不足を、敵国の捕虜の奴隷化で解消しようとし、「失政は政治の本質」と開き直る。土鬼の皇兄ナムリスは実権を握っていた弟を殺し、「若い頃やつは本物の慈悲深い名君だったよ。土民の平安を心底願っていた」「だがそれもせいぜい最初の二十年さ。いつまでも愚かなままの土民をやがて憎むようになった」とつぶやく。

作品からは権力への絶望、ニヒリズムが濃厚に漂う。私たち人間はどうしようもない愚かな生きものだが、時として崇高な自己犠牲も行う。赤坂さんは「ナウシカは人間の後者の面を体現する存在。周囲の人々もナウシカを愛し、自らの思いを託することで彼女を支えている。ナウシカの物語は、権力なき社会を構想するためのヒントに満ちている」と指摘する。

『風と木の詩』などの作品で知られる漫画家の竹宮恵子さん(71)は、自作「地球へ…」(80年)と「ナウシカ」は、同じ所に関心が向かっていたと感じている。「地球へ…」では、汚染された地球を復活させるため、人工知能が「諸悪の根源」人類の成育過程すべてに介入する究極の管理社会が描かれる。「ナウシカ」も物語の終盤、地球再生のため人間を含むさまざまな生命をコントロールしてきた「ジュワの墓所」という生ける人工知能が登場する。

竹宮さんはこう語る。

「今の時代も『誰かに支配された方がいい』と人々が思い始めている気がする。『中国は超管理社会だからコロナ対策をうまくやれた』という声もあった。だけど、管理された世界がいかに心地よくても、どこかで誰かが気づき、むかつき、自分の意思で生きようとする。人間というのはそういうもので、そこに希望を持って欲しい」

(太田啓之)

自然との共生 突き抜けた境地

コロナ下で読む ナウシカ

宮崎駿監督の漫画『風の谷のナウシカ』は、「自然と人間・文明との共存は可能か」というテーマを極限まで追求している。新型コロナウイルスという「自然」と向き合わざるを得ない私たちが今、学び取れることを考えた。

漫画版『ナウシカ』の映画版との大きな違いが、旧世界の文明と共に滅び去ったはずの「生命を操る技術」がひそかに受け継がれていることだ。トルメキア王国と戦う帝国・土鬼がその技術を用いて造り出した生物兵器「粘菌」の暴走をきっかけに、世界は破壊の淵へと追いやられていく。



物語のクライマックス、「シュワの墓所の」に描かれるナウシカ ©Studio Ghibli

生命を操る技術がもたらした惨状を目の当たりにしたナウシカは、「私達が呪われた種族なのは判っている」「大地を傷つけ、毒いとり、汚し、焼き尽くすだけの、もっとも醜い、いきもの」と絶望する。「動的平衡」の生命観で知られる生物学者の福岡伸一さん(61)は「ナウシカの言葉通り、人間は環境から収奪するばかりで、地球や他の生物種に迷惑しかかけていない。人間は地球にとっての『がん細胞』と言っても過言ではない」と指摘する。

驚愕の展開「映画に感動した人への裏切りでは」

明が創造した人工の生態系」だったことが分かる。ナウシカたち人類も、汚染された世界に適応できるように適応せられており、浄化された世界では生きられない。スタジオジブリの鈴木敏夫プロデューサー(62)が連載当時、「これは映画をみて感動した人への裏切りではないか」と宮崎さんに抗議したほどの、驚愕の展開だが、福岡さんは「自然界では、腐海のようになつた新しい生命・生態系が突然出現することはありえない。宮崎さん自身、ナウシカと共に腐海の謎を考えた結果、そうした結論にたどり着かざるを得なかったのでは」とみる。

土鬼の聖都シュワには、「生命を操る技術」を独占する、生きていくヒラミッドのような不気味な「墓所」があった。墓所の主は、腐海によって地球環境を浄化した人類の理想郷を築こうとしていた。ナウシカはそれを拒絶し、墓所と同じく旧文明の遺物である巨神兵の力で墓所を破壊する。なぜ、ナウシカは墓所の主の計画を否定したのか。

福岡さんは、物語のクライマックスである墓所の主とナウシカの対決に、作品全体のテーマである「ロゴス(論理)」と「ピュシス(自然)」の対立が集約的に表れているとみる。

ロゴスとしての人間の理性は、文明の力で環境や生命を制御しようとするが、ありのままの自然であるピュシスはどうやってロゴスの手にはあまらず、さまざまな形でロゴスへの反乱を起こす。気候変動やコロナ禍もその一例という。

「生命は光だ!」と主張するが、ナウシカは「ちがう、いのちは闇の中のまたたく光だ!」と叫び、光と闇、清浄と汚濁の共存こそが生命の本質であり、生命を技術で操ろうとすること自体が生命への最大の冒瀆と反論する。

「ナウシカの叫びはピュシスとしての生命の立場を代弁している。技術というロゴスを人間の身体や生命の領域に用いることには、最大限慎重になるべきだ」と福岡さんは話す。

シュワの墓所には、汚染に適応した人類を元に戻す技術も保存されていた。ナウシカが墓所を破壊したことで、腐海の力で世界が浄化された際には、人類は滅びるかもしれないことが暗示される。

社会学者の大澤真幸さん(62)によれば、「人類全体が存続するためには、個々の人間や他の生命種がある程度犠牲になるのはしかたがない」という考え方に對して、ナウシカは「人間を含め今を生きている個々の生命が輝くことが最も大切であり、それを追求した結果として、種としての人類が滅びたとしてもやむを得ない」という境地にまで突き抜けているという。

大澤さんはこう話す。

「ナウシカのたどり着いた考えは一見、矛盾しているようだが、そこにこそ、この物語のえもいわれぬ深みがある。『すべての生命同士でお互いの生命を共有する』という究極のコミュニズムとも言えるだろう。ナウシカが示した『自然との共生』のビジョンを、絵空事に終わらせず、どのようにして学問的な真実へと落とし込んでいくか。それは自分自身にとっても切実な課題だ」

(太田啓之)



デジタル版で、鈴木敏夫プロデューサーのインタビューなどが読めます。

◆「小川さやかゆめり観察記」は12日に掲載します。